ライマトルヒル（五一八五高地）の戦い

山田富雄
野方三丁目

我が歩兵六〇連隊は、昭和十三年、編成とともに中支に派遣せられ、武漢攻略戦をはじめ浙東、浙カンその他の主要作戦に参加し、ついで昭和十八年夏より南方ビルマに転進して、翌年三月より始められたインパール進攻作戦に参加した部隊です。

当時、林集団（第十五軍）の烈（第三一師団）、弓（第三三師団）、祭（第十五師団）の三兵団によりインド・インパールの攻略は行なわれた。

作戦のうち、私の参戦した記憶中で一番悲惨だったのは、パレル戦線山岳要塞「ライマトルヒル」の奪取攻撃を命令され、全将兵が決死隊となって白兵突撃を決行、同高地攻略に成功したが、翌日からの英軍の猛烈な爆撃と砲撃の下に、大隊主力は全滅にひとしい大損害を受けたことである。私は九死に一生を得て生還した兵士であります。

テグノパールを出発。暗夜、道なき道、又急坂を手さぐりで歩き前進を続行する。夜が明けると共に、おりからのライマトルヒルが高く屹立し、我々の眼前に姿を現す。

数組の斥候が敵情地形を捜索に出る。翌日夜襲攻撃を決する命令待ちだ。

このころ南方特有の雨季が襲いかかって来る。今でも忘れないが、疲れて眠りこむ将兵に雨は容赦なく降りそそぐが、皆目覚めようともしない。また山蛭が巻脚絆の中に入り込んで、我々の栄養失調の血を吸うかゆみで目を覚ますが、また眠りの中に落ち込む。内地の夢でも見ているのか、この一時が我々兵にとって一番幸福の時だ。明日の運命を誰も知らない。

私は此の頃下痢が激しく、兵の間で流行しているアメーバ赤痢が伝染したかと心配した。

いよいよ夜、当現在地を出発。ライマトルヒル麓にたどり着く。我が砲兵隊の援護射撃が開始され、静寂が破られた。

敵の照明弾が打ち上げられ、真昼のような明るさである。砲兵の射撃が終ると同時に、工兵隊の決死隊が鉄条網を破壊し、突撃路が出来る。

各中隊長の白刃が暗夜にひらめくと同時に突込めの命令。我々

は「喚声」をあげ敵陣へなだれ込む。彼我の手榴弾、自動火器、曳光弾が花火の様だ。狼狽した敵も頑強に抵抗、第一中隊一番右突角の陣地を占領。続いて我が四中隊も一番左の陣地を占領。第二中隊も右の掩蓋を爆破してこれを奪い取る。残敵を掃討したライマトルヒル（五一八五高地）は完全に占領した。

我が損害、何名かの戦死者、負傷者を出したがきわめて軽微であった。

壕の中には敵の兵器弾薬に混じって煙草や缶詰がある。久し振りにする煙草、缶詰が開けられ、敵さんの食糧にありつく。コンビーフ、ミルクの味が勝利の感激に浸るが、夜が明けると敵の逆襲が必ずある。

予期した通りパレル陣地より砲撃が開始された。敵の全砲がライマトルヒルの一点に指向されたのだろう、言葉では形容出来ない弾雨沛然として砲の重火器の連続射撃の如く、全山一瞬にしてその形を変えさせた。

飛行機の爆撃も加わり敵の歩兵はじりじりと陣地に接近してくる。

大隊長の至近に砲弾炸裂。頭部負傷される。大隊副官・四方庫太少尉敵弾を受け壮烈なる戦死。大隊長代理を各中隊長がやられるが、第一中隊長・不破隊長戦死。機関銃中隊長・真崎隊長も砲弾を受け戦死さる。

大隊の首脳幹部、我が四中隊長を除きほとんど戦死又負傷してしまった。以後第四中隊長が大隊の指揮を取られる。「大隊は現在地を死守する。一歩も退くな。あくまで死守」と各中隊に命令が出る。根岸小隊（現在秩父在）の一番左端にて私は軽機関銃で防戦する。

敵兵は喚声をあげ、自動火器を乱射し手榴弾を投擲しつつ突撃して来る。第一戦はこれを迎え撃ち、ある者は手榴弾を投げ、軽機関銃の掃射によりこれを撃退。その後何回ともなく凄惨苛烈な死闘が執拗に繰り返され、砲弾と肉弾、肉弾と肉弾との激突死闘が繰り返される。その都度戦死負傷が続出。日本軍の生命を無残にも又あっけなく奪って行った。

友軍の砲兵は何をしているのかと思うと、テキノパール方面の友軍砲兵陣地を敵機九機で爆撃しているのが目の当たりに見える。敵の砲撃は相変らず容赦なく機関銃の射撃のように降り注ぐ。敵兵のある者は自動小銃を乱射しつつ、またある者は勝ち誇って手榴弾を投擲しつつ、じりじりと一歩一歩陣内に肉薄して来る。大隊の全滅は刻一刻と迫って来た。

第四中隊長・佐藤政義中尉（新宿荒木町で「なる駒」という割烹をやっておられ、五三年頃亡くなられた）は、当時のライマトルヒル最高峰五一八五高地の夜襲攻撃を次の様に語った。

同地を占領確保していた佐藤隊は、予期せるごとく夜明けとともに猛烈なる敵の砲撃、またこれに膚接せる敵兵の逆襲に対

して幾度ともなく死闘を繰り返していた。
敵の砲撃はさながらスコールのごとく猛烈で、しかも次第に正確さを加え、掩蓋という掩蓋は逐次破壊され、山容一瞬にしてその形を変え、兵は一言も発することなく、一片の肉塊となって無残にも散華して逝く。
二回目の敵砲撃の最中、中隊の連絡兵・加藤兵長より「大隊長負傷」「谷間に転落」との知らせがもたらされた。私はこれは大変なことになったと思った。
しかし、不破大尉が健在だ。大丈夫と一瞬かすめた心の不安を打ち消した。私の右三メートルぐらい離れた壕の中に谷川衛生見習士官がいた。彼は着任後はじめてこのすさまじい戦闘に巻き込まれ、いささか呆然として戦闘の推移を見守っていた。私はふと彼に声をかけた。
「オイ、谷川大丈夫か？　負傷者を頼むぞ」
「大丈夫です。佐藤隊長」と返事があった。その瞬間、私は熱風を浴び土砂で少し埋まった。一塊の肉片が私の胸に血潮とともに突き刺さった。そこにはもう谷川衛生見習士官の姿を見ることができなかった。
戦闘はいよいよ熾烈凄惨な状況となってきた。不破隊の分隊長が血相を変え、私の壕の中に転がり込んできた。不破隊長砲弾の直撃を受け戦死。続いて機関銃分隊長が「真崎隊長砲弾を受け戦死」と悲報が次から次へと私に届いた。
「よし、いまから吉岡大隊の指揮を第四中隊長がとる。大隊は現在地を死守。一歩も退くな。あくまで死守」と私は各隊に命令した。
根岸小隊長に声をかけた。「根岸、いよいよ最後かもしれぬ。連隊大隊の名誉にかけても現在地を死守、最後まで頑張れ。頼むぞ」「隊長最後の一兵になるまで頑張ります」と力強く頼もしい返事が弾雨の中から返ってきた。
私は大隊本部の方面に目を移した。なんとしたことだ。本部の兵が陣地を捨てて転がるようにして、やまを駆け降りているではないか。私は一瞬信じられなかった。自分の目を疑った。
「大隊副官・四方本部は何をしているんだ。なぜ逃げる。卑怯者。われわれは戦っているんだぞ」
砲火交錯の中、私の絶叫は届くはずもなければ聞こえるはずもない。
（当時、四方副官は大隊長負傷転落後よく本部を掌握し、不破大隊長代理の命を奉じ、各隊との連絡命令伝達に遺漏なきを期するとともに、敵の逆襲に対して自ら陣頭に立って本部兵力を率い奮戦中、不幸にも敵砲弾のため壮烈なる戦死を遂げていたのであった）
私はすぐ右台地で敵逆襲部隊を猛射中の機関銃分隊のところへとんで行った。
「分隊長、目標、山を逃げる大隊本部兵の頭上を威嚇射撃せ

よ」。瞬間、機関銃分隊長（某軍曹）は、「中隊長」と返事をとまどったが、すぐ私の意中を察したのか、銃口を逃げる兵士に向けた。

「目標、逃げる大隊本部兵の頭上を威嚇射撃せよ」。分隊長自ら銃口をその方向に向け、射撃を開始した。頬は痙攣し、涙がその頬を伝わって銃身の上に落ちた。

（筆者注＝元日本軍隊では、退却することは許されなかった。まして上官の命令なくてはなおさらのことであり、上官の命は事のいかんに拘わらず服従すべきで、自分勝手な行動は許されなかった。言葉も「退却」でなく、「一時撤退」と言われた）

戦闘はますます惨烈の度を加えていく。数次にわたる敵砲撃逆襲のため、兵力の消耗はなはだしく、各隊の兵力はすでに十名内外となった。友軍砲兵の支援射撃要請のため、幾度か合図の日の丸を振った。しかし飛びくるのは敵砲弾だけであった。友軍の砲兵陣地は敵機に爆撃され支援射撃どころではないのであろうか、頑強に抵抗し敵の逆襲を阻止していた不破隊も、機関銃全部破壊されながらよく敵と対していた機関銃中隊もいまは力尽き、ついに寺口隊の陣地に後退した。大隊の兵力わずか三〇名程度。敵の砲撃は容赦なく我々の頭上に炸裂し、敵兵はじりじり接近してくる。

いよいよ最後の時がきたのだ。私は根岸小隊長を呼んだ。根岸准尉は私の意図に機先を制するが如く「中隊長このままでは全滅です。砲兵の支援射撃もなく支隊主力はこの苦闘を傍観しているだけです。いま中隊長は大隊長代理として撤退の命令を下してください。部下を犬死させないでください。大隊は全滅です」。手榴弾が二発三発と付近に炸裂した。敵は、さらに山頂に迫ってきた。西側の味方陣地はすでに沈黙し、聞こえてくるのは敵の射撃音だ。指揮班にいた加藤兵長が手榴弾の安全栓を抜いて立ち上がった。「中隊長殿加藤が敵兵に突っ込みます。その間に一時山を退いて下さい。加藤兵長行ってきます」。加藤兵長は味方の屍を乗り越え、手榴弾を投擲し銃剣を両手にしっかりと握り一人喚声をあげて敵中に突撃していった。私は決心した。加藤兵長のこの死をむだにしてはすまぬ。私は撤退を命じた。加藤兵長は中支以来中隊にあっては、主として功績係の助手として真面目にただ黙々として仕事に精励していた招集兵であった。普段きわめておとなしい兵長のどこにこのような勇気が、そして犠牲的精神があったのであろうか。隊長を死なしてはいけないという上官を思う部下の心が、真情がそうさせたのであろうか。この加藤兵長の最期の突撃は山本支隊長も親しく眼鏡で観ておられた由。後日大隊が支隊本部に集結した時、この模様を親しく話された。

戦死者　不破大尉以下一〇三名
負傷者　吉岡隊長以下一〇八名